

非暴力的危機介入法を用いた学校改善

講師 CPI (Crisis Prevention Institute. Inc.) 危機予防研究所ジャパン代表 新 福 知 子
執筆者 (受講者代表) 東京大学大学院教育学研究科修士課程 木 村 春 江

2001. 7. 26

1. はじめに

本稿では、今回受講した、CPIの非暴力的危機介入プログラム®を最初に簡単に紹介する。その後、若干の私見を述べることにする。

2. 非暴力的危機介入®とは

本プログラムは、情緒面や行動面の問題を抱える青少年の生徒達が、いざ、暴力的で破壊的行動をとった事態を管理するための、危機介入プログラムである。

サブタイトルにもあるとおり、本プログラムの特徴は、生徒達にCare (ケア), Welfare (幸福), Safety (安全), Security (安心) (略してCWSS)を提供する目的をもつことにある。根本的な前提として、行動の暴力化というものが、何らの原因もなく起こるものではない、ということがある。つまり、危機的状態が起きた場合に、教職員が取る行動によって、彼らのその行動が左右されるため、いざという時のための、危機の発展状況に応じた適切な対応を取れるためのトレーニングが重要となるというわけだ。そして、このプログラムによれば、上記の4つのCWSSを生徒に提供することによって、最悪な事態状況を回避することができ、教師の安全が確保され、それがひいては学校内の安全につながっていくというわけである。

以下、少々長くなるが、本プログラムにのうちで、筆者が受講した部分について、「健康教室」に掲載されている新福氏による説明を引用したい。

・トレーニング1日目 (6時間)

基本的な危機介入モデルの紹介から始まります。

すなわち、子どもが不安レベルからキレた状態に発展するまでの各段階と、各々の段階に応じた先生側の具体的な対応の仕方を学びます。また、さらに細かく、ワーキングサインの見つけ方や暴力に至らないようにするための言語的、非言語的な関わり方のテクニックが学べるようになっていきます。具体的トレーニング項目を以下に列挙します。

① 破壊的・崩壊的行動レベルに関して

子どもの行動にあわせた対応の仕方・暴力防止・破壊的／崩壊的行動を抑制するための、言語的技法・パーソナルスペース・CPIサポータティブスタンス・ボディランゲージの読み方・パラバーバルテクニック (声の表情の作り方) など。

3. 私見

今回筆者が体験したコースは、全コースのうちの一部のみである。それゆえ、本プログラムの全体像を理解しきれていない点もある。ここで、筆者が、本講習について意見を述べるには、誤解等もあるかもしれないが、プログラムの一部を受講して筆者なりの素直な感想を記したい。

筆者は、今回の講習会に参加するまで、こうした危機状況における対処プログラムがあることは知らなかった。講習を受講して最初に思ったことは、この種のプログラムが必要となっていると感じられる教育現場の現状に対するやるせなさである。プログラムそのものは、教師にとって、いざという時に備えて身に付けておくにはこしたことがないのであろうが、そうしたことが、頻繁に使われる状況下にあるとしたら、なんとも切ない。もっと、根源的なところでの改革が必要なのではないか、と思われてならない。

というのも、この種のプログラムが必要な背景には、こうした暴力的な事態が起こるという前提が存在している。これでは、暴力的事態が起こった際の事後的フォローにより更なる最悪な状況を防ぐことはできても、そうした事態の発生基盤そのものを変えていくためのものではないのではないか、という疑問が残った。もっともここでは、危機の状態に応じた教師の適切な対応それ自身こそが、治療的効果を持つとされているようだが、実際、うまく機能するのだろうか、と疑問も残る。

例えば、危機後のケアなどは、生徒が行動化に至るまでの経緯を振り返らせ、言語化するという作業であるように思えるが、暴力をもって自身を表現するあり方にい

たる生徒は、そもそも、それ以前で、自己の不安を言語化できないことにより、暴力に至っているのではないのだろうか？

筆者は以前、公立中学校で相談員をしていた経験があるが、暴力的行為に訴える生徒の、言語化能力の不十分さを感じていた。以前、書字文化（リテラシー）のないところに暴力が発生するというを読んだことがあるが、筆者の体験と照らし合わせても、その考察には納得がいった。となると、生徒の不安を適切に言語化できる能力を身に付けたり、また、日々の授業実践の改善などといった根本的対応も平行して必要ではないか、と思ってしまう。

しかし、現状を愁いたところで、現状が変化するわけではない。とすれば、日々の地道な実践の中で、こうしたプログラムを利用しながら、少しでも現状を変えていこうとする努力が必要なのかもしれない。このプログラムは、いざという時の対応マニュアルであって、これだ

けでは根本解決にはならないのではないか、という思いがあるのが正直なところである。しかし、新宿山吹高校で行ったCPIの研修に対する教師の好意的な感想を読むと、この種のプログラムへの、教師の需要や期待の高さが伺える。日々の実践において、遭遇する様々な事態に、試行錯誤しながら、なんとか対応している教師の模索が伺えた。感想からは、個人の実践の中に生かそうとする教師の熱意が伝わってきた。とすれば、先に筆者が述べた感想は、理想論にすぎず、実際は、もっとどろどろとした関わりの中で、このようなプログラムなど、利用できるツールを有効に生かしながら生徒の対応にあたっていくしかないのかもしれない。いずれにしても、当事者として、教育現場に携わっていない学生である筆者は、複雑な気持ちである。

引用文献

「健康教室」東山書房 2001年6月号 99p.